

訪ねて 羅漢寺を

一三〇〇年以上の歴史を秘めた岩窟の古刹

耆闍崛山



今より遡ること二二六六年、大化元年(六四五年)にインドから渡来した法道仙人によって開かれたのがこの寺の興りとされる。

平安時代は山岳信仰の聖地であったが、暦応元年(一一三八年)臨済宗派の円龜昭覺禪師が入山のちに訪れた逆流建順禪師とともに一年で彫り上げた七〇〇余体の石像が羅漢寺の由来となった。

その後、普賢禪師が刻んだ千体地藏と十王尊を併せると、本寺の石仏は三七七七体にも及ぶ。

寺は約二六〇年間、臨済宗として栄えたが戦国期に衰退。慶長五年(一六〇〇年)、大寧寺の鉄村玄齋禪師により曹洞宗として復興を遂げた。

五百羅漢 ● 無漏窟に安置された五百羅漢。実際には五〇〇体以上ある。死に別れた人にそっくりな顔の羅漢が必ずいるともいわれる。なお、無漏窟の羅漢は修行の場、外の羅漢は生活の場と解釈されている



切り立った岩山の中腹に建つ山門と無漏窟(右)。かつては山岳信仰の聖地であったといわれる岩窟の風景



門の左右に配した阿吽の仁王像。右が阿、左が吽。異教の風貌だが製作年は寛延4年(1751年)とある



仁王門 ● 江戸時代の建立で、昭和18年(1943年)の火災を免れた貴重な門。天井には足利義満より賜った扁額がある

山岳信仰の聖地から 羅漢と地藏の庶民信仰へ

大分県北西部、切り立った岩山の中腹に建つ羅漢寺。かつては山岳信仰の聖地であったといわれるが、現在においても、その険しい参道や奇岩の連なりには霊気が宿る気配すら感じられる。

大化元年(六四五年)、インドから渡来した法道仙人がこの地を訪れ、インドの聖跡「耆闍崛山」を彷彿させたことからこの山で修行を積んだと伝えられ、山を下りる際に残したとされる金銅仏が「閻浮檀金觀世音菩薩立像」として寺に伝わる秘仏となった。

平安時代は天台宗に属した時期もあったが、暦応元年(一一三八年)臨済宗派の円龜昭覺禪師が入山。十六羅漢の描像を洞内に祀ったことが羅漢寺の起源とされる。さらに中国の僧、逆流建順禪師とともにわずか一年で七〇〇体以上の羅漢像を彫り上げたことを知った室町三代将軍、足利義満が羅漢寺に帰依、前管領の細川家からも支援を得て、寺の普請は整備された。

本寺には、五百羅漢の他にも室町期に普覚円智禪師によって刻まれた千体地藏や十王尊があり、これらを併せると実に三七七



取材にご協力をいただいた皆さま。左から、安全寺の高崎正見住職、本耶馬溪町ボランティアガイドの中島和貴氏、中津城広報企画局長の奥城啓一師